

社会学の批判性と社会学者の役割

武蔵大学 田中 俊之

■ 研究対象としての一般信者

宗教社会学的研究にたいする意義

「第1は、『信念体系の受容と獲得過程』の解明には、主体である信者自身の視点から記述された経験的資料が必要であり、この点で信者の口述資料の獲得がもつ意義である。そして、第2は、教祖に比べて従来は資料が乏しかった一般信者の世界を言語化する方法によって、研究対象が新たに開拓されたという点での意義である」[174]

「(社会学に固有の) 価値の一つとして、他の分野の学者たちだったら、平凡で科学的調査研究の対象として品位にもとるとみなすかもしれないような問題への、行き届いた注意がある——中略——もう一つ別の特有な価値があって、これは、自分自身の見解を自発的に表明することなく他人に耳を傾けなければならないという社会学者に固有な必須条件に由来する」[Berger 1962=1995: 244, 括弧内引用者]

■ ライフヒストリー・アプローチは何を明らかにするのか

「インフォーマントを選び出す基準であった『信者である』という事実は、インタビューを通して徐々に解体されていく。なぜならインタビューの目的は、インフォーマントが『信者になった過程とその意味』を明らかにすることであり、その結果、その語りには『信者でなかった私』という『事実』が示されるからである」[178]

→「解体されていく」とはどのような意味か。また、「信者でなかった私」という「事実」が示されないような語りにたいして、ライフヒストリー・アプローチはいかに対処するのか。

「他ならぬこのアプローチでしか接近できないような人間の『経験 (experience)』とは何であり、それを社会的に扱うということは、一体どのような作業をすることなのか」[179]

「(解釈的客観主義アプローチと対話的構築主義アプローチは) 当事者の口述によって『人間の経験を認識する』という認識目的を共有したうえで、その認識手段のあり方を論じている」[179, 括弧内引用者]

⇔序章における代表性・信頼性・妥当性への配慮と対話的構築主義にたいする懐疑

■ 社会学の批判性と社会学者の役割

「社会学は、現在、認識を生産する行為を通して、同時に社会関係を創造するという新しい課題を歴史的に要請されていると言えないだろうか。特に、『世界の意味を問う』という

課題を担おうとする社会学は、調査者自身をも一人の当事者として含むような認識の位置の確立を必要としている。なぜなら、『意味』は『私の向き合い方』としてのみ『在る』からであり、実証主義が牽引してきた自足的な『实在』という捉え方を拒否するとすれば、『意味』を示し得る根拠は、『認識者との関係』において他ならないからである」[182]

「社会学研究の課題の一つは、自らもその一員である現代の日常世界の事態に迫るために、それまでの社会的知見を総動員して、そして必要であれば新たな視点も創出して、自明だと人々（そのなかには社会学研究する自分自身も含まれる）が考えている事態が本当に自明であるのかどうかを、あらためて批判的に検討することなのである」[西原 2005:23 , 傍点引用者]

→このような認識に基づいたとき、社会学の批判性はいかに確保されるのか。また社会学者の役割とは何か。

⇔「近代に固有でまさしくアクチュアルな批判的思考形式」[Berger 1962=1995: 257]

『社会』とは建築の隠れた骨組みであり、この骨組みの部分はファサードによって一般の目からは隠されているのだと」[Berger 1962=1995: 47]

参考文献

Berger, P. 1962 *Invitation to Sociology* Anchor Books=水野節夫・村山研一訳 1995
『社会学への招待』新思索社.

西原和久 2005 「現代社会と批判的思考」西原和久・宇都宮京子編『クリティークとしての社会学』東信堂.